

『山桐のごとく香を放ち』¹⁾・『続・山桐のごとく香を放ち』²⁾に

みる高濱介二先生のあゆみと業績

小坂 淳子

Achievements of Professor Emeritus Sukeji Takahama through the Two Books,

“Yamagiri no gotoku Ka wo Hanachi (Sending the Fragrance of Tung Trees)”, Volume I and II

Junko Kosaka

2006年12月25日受理

高濱介二先生は、生きた現実のなかでものを考えていくこと、実践とかかわって考えていくことを生活信条にされました。事実の裏づけをもち、論理的な整合性と説得力ある研究論文を書くことで、研究者としての責任を果たしてきました。また、運動のなかでは、信頼に応え、人々との対話のなかで、はげます内容を含んでいるか、人間としての責任を精一杯果たそうとしているかなどを努力の方向にされてきました。

『山桐のごとく香を放ち』（以下、『山桐』）は、古希を祝う記念の本として出版されました。いろいろの人や研究会がまとめた本に、先生が解説をつけられたり、前書きやあとがきという形でかかれています。

また、『続・山桐のごとく香を放ち』（以下『続・山桐』）では、喜寿を祝って、高濱先生に薫陶をうけた者がどれだけ主体的に学んできたかという“証言集”になっています。

この小論は、先生の足跡をたどることによって、改めてその業績を確かめたいと思いまとめました。以下7つの見出しを基に述べています。1. 二つの本 2. これらの本の題名となった詩 3. 高濱先生の生きた時代 4. 年代毎に充実する研究会、サークル 5. 保育運動との出会い、研究所所長と校長、学長としての高濱先生 6. ひとりでがんばり、みんなががんばり、みんながひとりのようにがんばる 7. 先生から学んだことの“証言”

1. 二つの本

二つの書物は次のようなきっかけで誕生しました。はじめは、高濱先生のお人柄にひかれて、古希を迎えるにあたって何かお祝いしようと話し合いをしている間に「いっそのこと、いろいろあちこちで書いたり、すすめたりした先生のことばを書いたものを集めて、一冊の本にしようやないか」ということで、編集委員会³⁾を立ち上げて、『山桐』の本が編まれました。

“育む”というテーマで編まれたこの書物を構成する珠玉の内容には、高濱先生の自己形成の道筋、教育実践論、また、保育・学童保育の要求運動と学習運動

の接点としての役割や各種研究会代表として若手研究者をはぐくみ、はげますいくつかの短文が紹介されています。2000年、出版を祝う会と古希の会で、編集委員会を代表して、田邊和徳さんは、次のように『山桐』を紹介しています。

「この本は大変ふくらみのある、広がりのある本である。本が分厚いという意味ではなく、むしろこれを読むことによって、いろいろな時期のこと、事柄、人を思い出し、しのんだりする、そういうふくらみを読むものにあたえる」

古希のお祝いの会には約150名の参加者がありました。卒業生をはじめ、研究者、教育・保育・学童保育

※ 高濱先生は、内容の深いものでもわかりやすい表現で書かれています。それに習って、「です調」で書いています。

1) 『山桐のごとく香を放ち』編集委員会編『山桐のごとく香を放ち』あゆみ出版、2000年

2) 『続・山桐のごとく香を放ち』編集委員会『続・山桐のごとく香を放ち』2006年

3) 編集委員（田邊和徳、木田淳子、横田昌子、杉山隆一、前田美子、滝澤直子、大坪和夫）

関係者、古くからの友人、地域活動関係者など多分野にまたがる参加者でした。

さらに、『山桐』が出版されて7年後に『続・山桐』(2006年7月)が発行されました。『続・山桐』の発行には、二つの理由があります。

一つは、この『山桐』の出版会と古希の会は高濱先生にとって大変感動した思い出となっております。この会の記録を是非欲しい、という高濱先生からの要望がありました。そこには、祝う会で、挨拶をされ方々の中の4人(青木一、恒吉宏典、田中昌人、木田淳子)が亡くなられて、おそらくこの4人にとっては生きておられた最期に近い発言であったという先生の思いがありました。

また、先生には、亡くなられた木田淳子さんを偲ぶ会に出版された『凜～愛あふれて』⁴⁾の内容に感動されましたが、その感動はいまや木田さんに伝えられない。死んでからの弔辞や偲ぶ文章ではなく、生きてあるあいだに、思い出などを共有したいという要望がありました。

それは、「教師の仕事のメカニズムに由来することになるから」(高濱)というのがその理由でした。つまり、「教育のプロセスは、技能や知識を伝達する側面と学習者の主体としての人間をつくるという側面を分かちがたくもっている」ので、「教育という文化の評価に、教える主体よりも学習の主体の評価を重視する必要がある」ということです。

こうした背景をもとに、短期間でしたが、編集委員会⁵⁾を立ち上げ、喜寿を迎えられる先生のお祝いもかねて、古希の会の参加者を基に呼びかけを行いました。

喜寿の会は、短期間のうちに、先生と出会った人たちから心のこもった85名もの寄稿文が寄せられ、約100名の方が会に参加されました。

高濱先生は何よりも人とのつながりを大切にされました。『続・山桐』は、先生との交流と人格にふれるなかで、「学ぶ主体」が何をどう学んできたのかという、いわば証言集とも言える性格もっています。

2. これらの本の題名となった詩

2つの書物の題名になった「山桐のごとく香を放ち」(「山桐の詩」と略)は、美見昭光さん(元大阪学童保育連絡協議会会長・元大阪総合福祉専門学校事務長)が、高濱先生の大阪教育大学退官時に贈られた詩です。

『山桐』の編集をされた木田淳子さんは、この詩によせて、「高濱先生にふれられた多くの人々は、きっと、山桐の姿に寄せて詠った美見さんの詩に深い共感を覚えるだろうと思います」さらに「大樹でありながら決して権威で人を押さえ込むことがなく、常に、それぞれの人がもつ主体的な力に限りない信頼を寄せておられる」と印象を紹介しています。⁶⁾

山桐のごとく香を放ち ボクたちの高濱先生

詩 美見昭光

あなたは
戦争の最中に
少年時代を送り
戦争の酷さを
子ども心に見詰めながら
生きてこられました

しかし幸いにして
戦後の民主主義の中で
青春時代を生き
平和と民主主義
人間の尊厳について
学ばれ実らせ
今日の業績を築かれました

山桐の木のように
自然の中に立って空を仰ぎ
桐の木のように
柔らかい木肌で
おれは偉いぞと
いばることもなく

4) 木田淳子さんを偲ぶ会編『凜～愛あふれて』2005年

5) 編集委員(久保真澄、小坂淳子、白井舒久、杉山隆一、滝澤直子、高橋敏夫、西岡豊子、三原順子、前田美子、松浦義満)

6) 『山桐』244ページ

だが

山桐の花は

強い高貴な香りを放ち

思わず人をハッとさせ

人の心を捕らえるにはおかない

六月の或る日

初めての山桐の花に出会った者が

驚いて佇むように

あなたの書物には人を立ち止まらせる

豊かな味わいがある

3. 高濱先生の生きた時代

われわれは誰一人として、自分の生きる時代を選ぶ事はできません。先生は世界大恐慌の年（1929年）に生まれました。この時代は、成長期に社会の価値観がそっくり変わってしまったという稀有な経験をされた世代でもあります。

「15歳（敗戦）にして自分の考えがないということがしんどかった。みんなと同じではいけない。自分で考え、自分で決めて、行動できるようにならなければだめだ、それ以外はしないと決めた」⁷⁾、このことは、高濱先生から「事実即しものごとを考えること、自分が得心するまで考えてから行動すること」を学んだと、杉山隆一さんが寄せられている文⁸⁾からもわかるように、この経験が高濱先生の原点になっておられるように思います。

山桐の詩は、「しかし、幸いにして戦後の民主主義のなかで青春時代を生き」と、あります。現在のよう、大学が大衆化されている時代ではなく、当時、大学や専門学校への進学率は、1～3%の時代です。旧制高等学校⁹⁾から、旧制の帝国大学と呼ばれていた最後の東京大学へ進学されます。高校時代に教師として信頼していた森三樹三郎に相談して、社会学—社会思想史を専攻にすべく文学部を選びます。

入学後は、中国研究会、社会科学研究会、川崎の労

働者調査や群馬県の農村調査へも参加されています。革命のなかで揺れ動く新中国に関心を深め、中国語の講習会に通いづめ、全国中国研究会学生連合会（学生中研連）の運動に打ち込まれています。卒業論文テーマは、「中国農村生産合作社の研究」を選ばれています。

1953年、大阪学芸大学（後の大阪教育大学）に赴任され、そこで、教育社会学を担当され、多くの研究論文、著書をだされています。

大阪教育大学（教育学）の田邊和徳さんは、『山桐』（「はじめに」）に、高濱教育社会学の真髄は、「お若いころの哲学、経済学研究を踏まえた科学方法論の探求をもとにした問題に対する徹底的な思索と分析、いわば具体的な減少や対象に対する“科学と実証と批判の精神”」にこそあると指摘しています。

高濱先生の主要著作一覧を15～19頁にのせています。田邊さんは高濱先生の学問的成果についても、次のように紹介されています。

一戦後日本の教育が直面した諸問題に対する深い分析と思索と、それを乗り越えて子ども・青年の人間的な教育と発達を追求してきた教育実践・運動とを源泉としています。それは、『現代資本主義と教育』（汐文社）、『教育問題の社会学』（あゆみ出版）その他の編者・論文に遺憾なく示されています。

とくに上の二つの著書は、いずれも「教育社会学研究の試み」という副題がつけられています。ここには先生の学問的謙虚さとともに、批判と確信、すなわちその浅い「現象主義」、本質に迫らない「実証主義」にはしる一般の社会学ないし教育社会学研究の傾向に対する、また他方、主観主義的な「理念主義」の教育学に対する批判と先生の科学としての主張と確信が込められています。

4. 年代毎に充実する研究会、サークルの登場

サークル活動の弾圧を受けた戦前とはことなって、戦後は雨後のたけのこのようにサークル活動が生まれてきます。民主的な学者・研究者は、勉強会や研究会、サークルなどを結成し、諸外国の理論なども学び、

7) 『続・山桐』8ページ

8) 『同上』122ページ

9) 1947年に学校教育法に基づき、新制高等学校が発足した。旧制高等学校は、1950年まで存続（1941年に全国で計32校）、3年制で文科・理科に分かれ、高等普通教育の完成をめざしたが、実質的には大学の予備部門だった（百科事典マイペディア・電子辞書版）。

討議し、働く人の学習運動や民主的な教育運動や教育研究集会、労働組合運動なども支援し、集会に出かけて教えながら学び、教育現象を史的唯物論の立場から分析して、現状の批判をとおして理論化していくという学びのスタイルがとられています。

戦後は、社会科学の方法論から教育学を構築するべく、教育研究者による批判精神と民主主義的気風のあった「関西教育研究懇談会」（関教懇）や、民主主義科学者協会（民科）教育部会、さらに民科の教育部会の生き残りのメンバーを中心とした勉強会や教育サークル運動が高揚し、「全生研」（全国生活指導研究協議会）「全生研大阪支部」、「大阪教育サークル連絡協議会」（大阪サ連協）、「関西中国教育研究会」など、積極的に参加されていきます。

高濱先生が、多くの哲学者や経済学者とも知り合い、なにかからでも学びとりたと思って教わる事になったのは、「関西教育懇談会」でした。そこには、関西の若手でいろんな立場の人々があつまっていました（関西大学の鈴木祥蔵さん、大阪市大の横田三郎さん、和歌山大の西滋勝さん等）。批判精神と民主主義的気風のあったこの勉強会が、教育学上での思考様式を築く上で得がたい時期になったこと、また、講演等をつうじて、みんなを教育しながら、指導しながら、自らも学ぶという科学者としての態度をもっていた小川太郎さんから生きかたや研究者としてのあり方を学び、高濱先生は、小川太郎さんを、恩師の一人であると言われていきます。¹⁰⁾

1) 60年代はじめ、「現代社会研究会」（現社研）

—社会科学としての社会学の研究—細野武男、堀喜望、中野清一、野久尾徳美、杉之原寿一、真田是、高濱介二らの各先生が居られました。この研究会の趣旨の一つは、院生をはじめとする若い研究者に発表の場を与え、育てていくというものでした。中でも真田先生や高濱先生はまだお若くお元気でした。とりわけ、高濱先生のご発言は毎回大音声の熱弁でなされていたことを今でも鮮明に覚えています、と林彌富さんは語っています。¹¹⁾

2) 1961年 大阪生活指導研究協議会（大生研）

子どもにとって「生活」は人間的自立の基礎を育てるものです。子どもの発達に法則性と子どもの生活や地域の特徴をふまえた生活指導の実践を提起されました。当時の「班・核・討議づくり」という「学級集団づくり」への「定式化」に批判的な教師たちによって大阪生活指導研究協議会（大生研）が結成されました。

—高砂さん、高杉さん、荒尾さん、陸路さん、片原さん、西岡が事務局を担当し、毎月大阪府内のすぐれた、あるいはすぐれていなくてもいろいろな困難を抱えている教育実践を報告しあって勉強しました。その中で特に思い出深いのは、八尾中問題、落第生教室、核・班づくりの問題、船場中学の木下先生の実践など、いろいろな実践を討議しあったことです（西岡豊子）。¹²⁾

—「脱戦後」といわれた時代になっても、子どもの教育環境は必ずしもよくなり、生活指導の質の高揚は重要な課題でした。この中で大生研が果たした功績は大きいものがあり、その担い手である教員の指導、助言をサークルを通して続けてこられました。私は先生の民主教育の基本理念を大生研の例会と先生の著書を通して学べたと自負しています（福原明知）。¹³⁾

3) 1966年 大阪教育サークル連絡協議会

（大阪サ連協）代表 高濱介二

教育実践を交流しあい、すぐれた実践や先進的な経験のなかに、民主教育の原則をみいだす教育研究サークルとして、近畿・東海教育サークル活動がありました。70年安保を前にして、大阪でも、教育研究上での要求と責任を基礎に、青年教師を中心に無数のサークルが生まれてきます。やりがいのある、効果的な教育実践をもとめ、すべての子どもの成長・発達を保障し、いきいきとした子どもを育てるための教育研究を行いたいと大阪教育サークル連絡協議会が発足します。

高濱先生は、「教育サークルの運動は、政府や文部省の文教政策、権力の行政をつうじた教育や教育実践に対する干渉・統制に対して、もっとも現実的

10) 『山桐』215ページ

11) 『統・山桐』101ページ

12) 『同上』146ページ

13) 『同上』115ページ

で具体的な“批判者の地位”にたたされている」と述べられています¹⁴⁾。子どもの教育に責任をもつ実践をおこなう事がたたかいであり、また、教育反動化の動きと連動した政策へ広汎な民主勢力と統一してたたかう必要性、目の前の現象だけにとらわれない視野でみることが提起されています。

大阪での教育サークルは、そんななかで発展をし、各地の教育実践を軸に編集した機関紙「大阪の土とあぶらの中の教育（略称“土とあぶら”）」が発行されます。

－“土とあぶら”を長く継続できたこともまた、先生のご指導ご協力のたまものです（木下浄）。¹⁵⁾

4) 1967年 現代教育科学研究会（現教研）

大阪に、高濱先生を中心とした若手教育学研究会のグループで結成されます。

教育の軍国主義化が進行するなかで、教育の全面にわたってその本質的解明を行うことは、教育研究者に課されている社会的責任であるという自覚が、関西に在住している若い教育研究者の結集を促し、「現代教育科学研究会」を発足させました。

具体的には、1ヶ月半ごとに例会を持ち、現場の先生方の交流を深めて日本の現代的課題の共同研究をすすめるために、①教育の民主的科学研究をすすめる。②科学的世界観の立場をつらぬく。③自由な討論で研究者の交流をはかるといった趣旨を旨としておりました。中身は小川太郎編『講座・集団主義教育』（全3巻、明治図書）をとりあげ、見田石介著『資本論の方法』（弘文新社）やヘーゲル『精神現象学序文』の読書会、さらには、わが国の代表的教育領域でのイデオログ分析・批判と共通理解などでした。

高濱先生は、この研究会では最年長で、組織者であり、共に学ぶといった研究者集団が出来上がっていきます。1970年『国民のための教育科学』、1983年『教育の原理とその展開』の出版活動へと結集していきました。さらに、1987年には実践上の必要に応える理論的、科学的な分析と視野が求められ

ている期待に応えて、『道徳教育の原理とその展開』を発行しています。

－同じ研究室で席を同じくするなかで、いろんな研究会に引き入れ（高濱さんが）私の研究者としての土台をつくってくれたのは、「現教研」です（藤本文朗）。¹⁶⁾

－この研究会では、『国民のための教育科学』が刊行された直後で、例会では、この本の合評や当時の中教審の教育改革案の批判的検討を例会の内容としていました。その熱気と血気は、穏やかな研究ムードにいた私には驚きでもあり、また魅力でもあり、毎回新鮮な刺激を受けていました（田邊和徳）。¹⁷⁾

－何度か現教研から本を出す機会もあり、本のあり方やテーマへのアプローチや書き方をめぐって、時に若い者同士が激論をたたかわせたこともあったが、必ず先生がうまく調整され、これによって、人間関係が悪くなる事はなかった（細井克彦）。¹⁸⁾

－私には、野中さんがあって、野沢さんがあって、高濱先生がいらして、現教研があって、今がありません（北川邦一）。¹⁹⁾

5) 1970年9月16日結成 大阪教育大学教育・科学研究会（教科研）

－大学教官・大学院生・学生の三者が対等の立場で、教育・自然・社会科学を研究するサークルが結成された。高濱先生や大学院生の方が、学生を組織し、民主的な研究者、教育者として育てようというねらいもあったということの後から聞きました。（略）結成準備会やその後のサークルの活動の中で、私は、教育理論が人間を抽象的にどう見て、育てるかということではなく、社会や政治との密接な関連の中で論議され、創造されなければならないことを教えてもらいました。学べば学ぶほど、真理・真実を追究する科学が民主的な未来社会を志向するものであることを実感し、自分の生き方に確信を持つようになりました。また、サークルの運営に関する「スタッフ会議」には教官代表で高濱先生が出席され、先生の研究室が部室のようになりました。（略）現在、どんな困難な状況が起こっても、確信をもって行動

14) 『山桐』171ページ
15) 『統・山桐』114ページ
16) 『統・山桐』104ページ
17) 『同上』100ページ
18) 『同上』105ページ
19) 『同上』93ページ

できるのは、「教育・科学研究会」で学んだことが基盤にあると思います（佐々木温子）。²⁰⁾

—大阪教育大学、関西に高濱先生を中心とする「教育・科学研究会」の旗揚げとその存在を知った時、思い切って大阪教育大学の大学院に入学を決意しました（白井舒久）。²¹⁾

—「教育の勉強をするなら、授業より、「教育・科学研究会」にいることだよ」といった機運が溢れ、私の2年間は、殆どこの「大教大 教・科研」に費やされたと言っても過言ではない（岡本定男）²²⁾

—「私は理科系でしたので、直接先生の授業は受けなかったのですが、院生協議会を創ろうと各分野の院生が集まって準備をしていたところに先生と初めて出会い、その後、保育研究所や保育学校などでいろいろ教えていただきました（平尾達夫）。²³⁾

6) 1985年 現代子どもの科学研究会

(現科研) 顧問 高濱介二

—この研究会は、報告しても学べる、参加しても学べる、何がなんでもこの研究会だけには参加したいと思えるような、だれにとっても、自分自身にとっても、あまり負担にならないが、魅力たっぷりの研究会があるといいなあ、そんな研究会を、勤めたり、住んだりしている地元につくりたいと、淀川をはさんだ大阪の北部、枚方を中心に北攝や北河内の人々で発足しました（高濱）。²⁴⁾

このような願いをもってはじめられた現科研の活動は、多くの成果と実践結果を生み出しています。高濱先生の古希や喜寿の会の参加者や『続・山桐』の投稿者にみられるように、先生との間で継続された交流の源となっていることがわかります。

月一回の定例研究会（第二土曜、6時から、京阪・枚方市駅前の会館）で教育実践の交流を軸に理論学習も行い、会員は、自らの実践を報告（統一テーマ“子どもがかわるとき”）し、年一度、夏の合宿を行いました。

例会での実践報告、理論学習に参加されたメンバーは研究者、教育・保育・学童保育者、少年団やその指導員、塾の先生に及んでいることが特徴です。10年間（1985年から1994年）で、報告者だけでも

次の51名（敬称略）に及んでいます。

上野崇之、田坂喜彦、炭村治憲、三原順子、梶原郁恵、大坪和夫、松野由子、福田信子、松本啓子、木田淳子、高木方子、近藤恵子、松浦哲朗、渡辺元、森川絃一、安田信恵、真田和世、小部修、河崎かよ子、小林幸一、木村久男、宮原晋、赤井靖彦、北村和美、大野真理生、信濃小路葉子、久保真澄、船寄俊雄、柳沢嘉子、宍戸友枝、川上武、山本修平、小松正明、竹中史子、前嶋一誠、上野孝子、橋口周二、平野信喜、福原明知、桑原英代、土谷邦子、石村ひとし、山下達朗、榊原義夫、白嶋美智子、吉津実太、関野仁美、秋山みち子、田口早苗、渡辺真喜子、泉谷玲子です（森川絃一）。²⁵⁾

これらの実践記録は、1994年8月には教育同人誌「心をつなぐ」を創刊しています。そして、それらの活動結果が刊行物となりました。森川絃一『思春期の峠を登る子ら』（1989年7月あゆみ出版）、河崎かよ子『お母さんも歌って』（1989年11月、あゆみ出版）三原順子『先生！もっとやろうよ』（1990年5月 あゆみ出版）小林幸一『輝け思春期 子ども町』1993年8月、あゆみ出版）。

高濱先生は、それぞれの教育実践記録や白嶋美智子『仲間の中で光るとき』（1995年2月あゆみ出版）の学童保育記録実践に即した心あたたまる「解説」を書かれています。

—実践した本人である私は、「解説」を読んで、深く納得し、多くを学べたという実感を味わうことができました（森川絃一）。²⁶⁾

—大阪に高濱あり、というだけで、大阪の教育労働者が、幸せでした。（三原順子）。²⁷⁾

5. 保育運動との出会い、研究所所長と校長、学長としての高濱先生

大阪保育運動連絡会が1964年に結成され、1974年には、財団法人大阪保育運動センターへと発展していきます。大阪の保育運動の特徴は、働く父母の要求を基礎におき、保育・子育ての社会化を保育士たちと共

20) 『同上』69～70ページ

21) 『同上』96ページ

22) 『同上』91ページ

23) 『同上』67ページ

24) 『山桐』14ページ

25) 『続・山桐』59ページ

26) 『同上』62ページ

27) 『同上』71ページ

同じ、学習運動と結びつけて保育士の専門性を高めていったことです。高濱先生と大阪の保育運動との出会いは必然性をもっている流れに思われます。

—「無資格なので、何となく自信がもてない」、「ゼロ歳児保育をやれといわれたが、どんな保育をしてよいかわからない」、「もっと系統的に学習したい」と願う人たちの要望にそって第一回「保育学校」が開講された。その成功がその後の学習活動に発展したのです(横田昌子)。²⁸⁾

1970年、「第一回保育学校」講座内容と講師名

1970年10月～11月(全10回)

- 1) 現代の社会と保育問題—子どもの成長の権利・自由と保育の役割(高濱介二)
- 2) 知覚の発達—人間としての発達の始まり(秋葉英則)
- 3) 「手の労働」の発達—人間と動物の本質的な違い(秋葉英則)
- 4) 子どもの健康をどう守るか—戦後のあやまった児童の保育観(汲田克夫)
- 5) 言語の発達—子どもはどのようにして言葉を獲得するのか(秋葉英則)
- 6) 子どものあそび—労働(あそび)の組織化(秋葉英則)
- 7) 今日の児童文化と集団について—マスコミの影響と子どもの成長における集団の役割(高濱介二)
- 8) 子どもの保健と児童観—近代の保健観(汲田克夫)
- 9) 婦人労働者の保育要求と保母の生きかた(高濱介二)
- 10) 討論—保育問題の解決をめざして

—保育学校では、高濱先生のご講義など、保育の技術のみでなく、人間の学びの基本に気付かせていただきました(吉瀬孝子)。²⁹⁾

—教材もなく、ただ仲間内で交流し、自主学习しか頼る術のない初期の指導員にとって高濱先生は大きな存在でした(白畠美智子)。³⁰⁾

1979年には、国際児童年の「未来の子どもたちに最良のものを残そう」のスローガンを受けとめて、保

育士や学童保育指導員、父母や・勤労者などによる2年近い募金活動で大阪保育研究所がつくられます。次の文は、保育研究所の綱領と活動指針です。

綱領(説明略)

—子どもを精一杯かしこく たくましくて 心ゆたかに育てたい。この願いは、なにものもうぼうことはできません。
—嵐に抗して 親たちと保育者の連帯を援助する 子育ての学問には 親のかしこさと保育者の専門的力量が必要です。
—私たち保育研究所は、運動の期待と実践の必要が生み出した誇りあるモニュメントです。
—私たちの研究所は、子育ての科学の砦です。
—私たちの研究所はみんなが利用し参加する自主的な共同研究の場です。

活動指針

1. 私たちは、子どもの権利を守るために、常に、平和と学問の自由を尊重し、研究の成果を公開し、保育実践の充実と向上をはかります。

1. 私たちは、働く人々の生活と権利を守るための研究・交流をはかり、保育者の労働条件の改善や専門的力量の充実・向上に役立つ研究をすすめます。

1. 私たちは、保育・教育に関する相談に応じ、地域での子どもを守る運動に貢献します。

1. 私たちは、子どもたちの心と身体の発育を破壊する戦争政策に反対します。

1. 私たちは、子どものしあわせとその条件や環境をつくるためのすべての運動と結びついて活動します。

綱領と活動指針は、高濱先生が精魂こめて書かれた、簡潔で誰にでもわかりやすい内容と表現になっています。その後、高濱先生は、大阪保育研究所の所長として、現場で実際に役に立つ人材を育てよう！と「財団法人大阪保育運動センター、国際児童年記念・大阪保育研究所附属保育・学童保育専門学院」(略称、大阪保育研究所附属保育・学童保育専門学院)を創り、校長となります。

この小さな学校は、保育や学童保育の現場の要求か

28) 『同上』44ページ
29) 『同上』120ページ
30) 『同上』126ページ

らつくられたものであり、その教育内容は、『年齢別保育講座』³¹⁾ や、研究所の綱領と活動指針の果実を実践しているようなものでした。カリキュラムは厳選されたもので、一流の講師陣による内容でした。現場で実際に役に立つ人を育てること、民主主義の担い手を育てる、リーダーとなる人を育てる、そうした教育目標をかかげていました。

—先生のお誘いで専門学校で哲学の授業をもたせていただいています、その学校に行きますと、クラスは高校を卒業してすぐの年齢から、30代、40代くらいの人まで年齢的には相当幅のある生活経験も多様な人が学生としてきていますけれど、非常にお互いを結び合う信頼関係ができています。何か、先生の半世紀近い教育研究に成果というものが、今、堺の学校全体の教育的雰囲気を満たしているのではないかとそんな感じがして、学校まで行くのは片道2時間ぐらいかかりまして、本当は大変しんどいですが、そういう学生たちと出会うのが大変楽しくて行かせていただいています、と加藤西郷さんは古希の会であいさつされています。³²⁾

この大阪保育研究所附属保育・学童保育専門学院の校長として、さらに、認可の学校となった大阪総合福祉専門学校の、そしてそれらが発展的に建設された大阪健康福祉短期大学の学長を2006年3月に退かれるまで担われました。

6. ひとりでがんばり、みんなでがんばり、みんながひとりのようにがんばる

高濱先生は、民主主義をあらわす言葉として、「ひとりでがんばり、みんなでがんばり、みんながひとりのようにがんばる」と強調されています。入学式の時には、「君たちがこの学校を選んだことを後悔させない」といわれます。二つとも大変短いことばですが、教職員のしごとの課題を明確にあらわしていることばです。

個と集団についての好ましい人間関係として、「ひとりとはみんなのために みんなはひとりのために」と考えられがちだったが、高濱先生は以前から疑問を持ち続けておられました。個も、集団も、民主的な人間関係を発展させていく上で、「ひとりでがんばり、みんなががんばり、みんながひとりのようにがんばる」という筋道の方がいいし、大切だと考えました。一つの集団の質は、その構成員の一人ひとりが、どのように人間的に豊かになり、民主的で、生き生き育っているかにかかっている、一糸乱れないチームワークなどで集団の質をはかることはできないと先生は言われています。

それでは、「みんなでひとりのようにがんばれる」集団形成にいたる筋道とは何なのか。何を大切にしなければいけないのかが問われることになります。

ひとりでがんばれる力が基本的に必要ですが、自分に自信がもてない、なげやりになる、まして将来を展望する力がもてないなど、学生は、それぞれの生育暦や成長途上の課題をもって入学してきます。幸いなことに、保育士や介護福祉士養成の学校ですから、実技や実習があります。専門職として仕事をするという目的意識をもって学習できるという利点があります。

なによりも、自分で考える事ができるように、グループワーク等を通して、「ひとりの学びをみんなのものに」しあげていきます。みんなのなかで自分の気持ちを伝えられ、辛いことやしんどいことを共有し、保持し解決していく懐深い人間関係<なかま>意識ができると、“集団の質”が変化していきます。この集団は、選別することはよくないと先生はいわれています。「できる子とできない子がいて、相互にいい刺激をしあうことで個の能力が育つわけだから、選別する事は、能率があがるように思われがちですが、これでは相互にいい刺激が生まれません」。³³⁾

「みんなでがんばる」というのも、決してみんな一緒に、というわけではありません。学園祭など、ひとつのことをみんなでとりくむなかで、お互いに、話し合うなかで、できることやできないことを分かりあえ、

31) 大阪保育研究所編 高濱・秋葉・横田監修『年齢別保育講座』全6巻、あゆみ出版1984年

32) 『統・山桐』148ページ

33) そこで、中国の評価の仕方を紹介しています。5段階評価で、4は教えられたことがわかる、5は教えられたことを他の者へ説明することができるといふ評価のしかたがとられていて、非常に合理的な考え方であるとしています。自分ではわかっている人も人に教えるということはむづかしいことですし、自分でわかっていることを、人にわかるように教えるということは自分自身の能力をたかめることにもなるからです。『統・山桐』30ページ。

違いを認め合い、それでもやりとげる楽しみを共有していきます。これらは、一本調子にはいきません。その時の構成員によってとりくみの性格も内容も変化していきます。

このような取り組みによって、その集団が質的に変化してきます。「“ゆっくり、やさしく、ていねいに”相手の身になって、やりたい気持ちになるように人をはげますやさしさを、その感性と行動を、評価できる」集団がつくられていきます。³⁴⁾ そうすることで、お互いの違いを認め合った、それぞれが居場所をみつけれられる、みんなで一人のようにがんばることのできる集団へと変化してきます。話し合いが大変大事にされるのも特徴です。このように、学生が順応するだけの能力でなく、自分で考え、自分自身をコントロールできる力を育てるためには、教職員も管理や操作主義的な考えや、まして、能力主義などとたたかっていたいかなければなりません。

保育士や介護福祉士といった福祉の専門性とは、このような生活者としての主体的力量を自ら育てていくことが、プロフェッショナルとして社会的に評価されていく基礎になると考えています。

こういう実践を積み重ね、卒業をむかえて、“この学校を選んだ君たちに後悔させない”という言葉の意味を卒業生たちに感じさせようとしてきました。卒業後も実践者としての働くなかま、学ぶなかまとして成長してくれるかどうか問われます。

7. 先生から学んだことの証言

六月の或る日

初めての山桐の花に出会った者が

驚いて佇むように

あなたの書物には人を立ち止まらせる

豊かな味わいがある

「教育のプロセスは、技能や知識を伝達する側面と学習者の主体としての人間をつくるという側面を分かちがたくもっています。この二つの側面とも、教える

主体の意図どおり実現しないことは法則的で、教育の結果は、学習主体の意思、努力、工夫等にむしろ依存することが決定的」(高濱)です。高濱先生は、「教える主体が、私が教えたせいで、この子が良くなっていくというように思い込むとそれは本当の意味ですぐれた教師ではない。その気になるような主体性を引き出す事が大切である。すぐれた教師というのは、教える上で大きな役割を果たしたにもかかわらず教わった本人が自分で自分の力をつけたと実感した時にこそ学力というのは身につくことが基本」だと思ふ

と2006年5月インタビューで話されています³⁵⁾。それゆえ、高濱先生は、「僕のせいではなく、学ぶ側が力量がある。それが大阪の特徴です。なんでも言わなくても学ぶ。“ええなあ”と励ますというより、励まされるほうが力量がある」と古希の会で挨拶されています。³⁶⁾

学ぶ側は、「山桐の詩」のように、“ボクたちの高濱先生”として、身近にいて、思わず人をハッとさせ、人の心を捕らえずにはおかない存在になります。そして、かけがいのない“魅力”をもつ高濱先生を“はげみ”にし、また“羅針盤”にし主体的力量をたかめていくことができます。そのことを証言しているものが『続・山桐』ではないでしょうか。

「愛と知の巨匠」(三原順子)³⁷⁾、「人としてどうあるべきか、生きていくうえで大切なことを教えていただいた」(斉藤聖美)³⁸⁾、「あこがれの師」(藤田武久)³⁹⁾、「すべての原点を教えていただいた」(高品真由美)⁴⁰⁾。「枚方に高濱あり」(上野崇之)⁴¹⁾、「忘れねばこそ思い出さず候」(松野由子)⁴²⁾、「病んだ私の心身を蘇らせた出会い」(下園久仁代)⁴³⁾等です。

「高濱方法論に強く惹かれ、これはその後も研究の導きの糸となって今日にいたっている」(二宮厚美)⁴⁵⁾、「私にとって研究の師だけでなく、まさに人生の師である」(木田淳子)⁴⁶⁾、「私のまさに後見人であると思っています。本当にいろんな意味で先生から研究の上でも生きかたの上でも教わった事が多い」(石井郁子)⁴⁷⁾、「後塵の足下を照らす灯火として」(笠間浩幸)⁴⁸⁾。

34) 『山桐』70ページ
35) 『続・山桐』12ページ
36) 『同上』173
37) 『同上』70
38) 『同上』84ページ
39) 『同上』82ページ
40) 『同上』83ページ

41) 『同上』111ページ
42) 『同上』107ページ
44) 『同上』135ページ
45) 『同上』100ページ
46) 『同上』174ページ
47) 『同上』164ページ
48) 『同上』92ページ

故青木一先生は、高濱先生を「大阪のほこり」と言われています（古希あいさつ）。⁴⁹⁾

どれだけの人が人生の中で“師匠”と呼ぶ人と出会える幸運に恵まれているのでしょうか。

しかし、「先生に励ましてもらっているということはすごく怖いことで、『あなた自身に立ち返りなさい』と言われていたような」と小林幸一さん⁵⁰⁾が書かれているように、高濱先生を師匠にできるには学ぶ側の力量が問われるのです。

教育主体としての力量が求められ、そうして、実践してきた内容は、「精一杯」のとりくみだったかを問われる自問自答の自覚が、高濱先生を“こわい”先生にしている正体ではないのでしょうか。

先生の「好きな言葉」は？という学生の質問に答えたものは、「ほないこか？」とだけかいてあったそうです（岡本定男）。⁵¹⁾

(こさか じゅんこ 本学教授)

49) 『同上』150ページ

50) 『山桐』77ページ

51) 『続・山桐』92ページ

(著書)

主要著作一覧

著書論文等の名称	単著 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌等 又は発表学会 等の名称	概 要
1世界の教員養成 (『世界の教育』講座6巻)	編著	1958年8月	共立出版	「中華人民共和国の教員養成」を分担
2教育の現実と集団主義 (講座『集団主義教育』2巻)	編著	1967年2月	明治図書	「小学校の現況と集団主義教育」を担当
3従属と退廃の社会問題(講座 『現代日本の社会問題』4巻)	編著	1969年4月	汐文社	「教育における退廃」を担当
4現代資本主義の発展と教育	単著	1973年5月	汐文社	高度成長期、教育も爆発的に発展した。しかし、子どもの生活、家庭、社会・文化環境、学校の急激な変化は、様々な緊張や、矛盾を引き起こした。60年代、これらの問題に分析の目をむけた論文で構成した著作。第一部…現代資本主義の発展と教育および教育労働、第二部…子どもの生活と集団の問題、第三部…平和と民主主義の教育運動。
5学力回復 (講座『日本の学力』13巻)	編著	1974年8月	日本標準	講座「日本の学力」は学力論を構造的に展開したものであるが、その13巻は、いわゆる「落ちこぼれ」現象とその克服の実践的試みを、教育学、心理学、教育実践学の協力で探ろうとしたもので編集を担当した。分担執筆第1章第1節『落ちこぼれ』問題の歴史的位置と今日的定義では歴史的視点から「今日の子どもの学力実態を見る視点」を提起した。第2章第2節「教育条件の『貧困』と『落ちこぼれ』」(貞広太郎との共同研究につき本人担当分抽出不可)では教育条件の「落ちこぼれ」問題との関連について問題提起を試みた
6児童の教育と文化 (『児童問題講座』第2巻)	共著	1976年8月	ミネルヴァ 書房	第5章「戦後教育改革の今日的意義と教育運動」を分担執筆。1971年の中央教育審議会答申(第三の教育改革構想)に対し、改めて戦後教育は国民にとってどんな意味を持ったものであったか。児童、生徒にとって何を意味したのかを提起した。

7地域の文化と子ども組織	共著	1978年1月	少年少女組織センター	「世界の住民運動と子ども組織」を担当
8生活指導 (『教育実践辞典』4巻)	編著	1982年3月	労働旬報社	教育実践辞典は、教育現場の諸局面を理論と実践事例の両面から迫ろうとしたユニークな試みの辞典で注目をあびた。その第4巻は生活指導を扱い、編集責任を担当した。分担執筆「家庭・地域社会と生活指導」は「第1編 生活指導の基礎理論」第3章部分で、家庭・地域の変化と子どもの生活の分析をふまえ、学校と家庭・地域との提携の意義と教育力回復のための生活指導のあり方を探った。
9『燃える放課後－主体的努力を育てる学童保育の実践－』	編著	1982年11月	あゆみ出版	大阪保育研究所の最初の所産として出版。「子ども集団の組織論」を担当
10教育の原理とその展開	編著	1983年3月	現代教育科学研究会編 あゆみ出版	現代教育科学研究会の2年にわたる発表の結果を、教科書風にまとめたもので、7版を重ねている。編集代表を担当した。分担執筆は序章第3節「教育現場と教育諸科学の課題」第1部「教育の本質と学校」はじめに・第1章、第4章1節「今日の家・地域の変化と子育て」
11教師の生きがいと教育運動 (『中学教育実践選書』第10巻)	編著	1983年4月	あゆみ出版	編集担当
12中学生の心 (『中学校教育実践選書』3)	編著	1983年4月	あゆみ出版	中学教育実践選書の理論編にあたる1巻で、本書で思春期の特徴を新しい視点から分析した。高垣忠一郎との共同編集。分担執筆の第3章「中学生の心の“くずれ”と現代社会」では、現在を生きる中学生の心やその“くずれ”を、現代社会のなかで、人生における思春期を生きつづけようとする生き方の問題と結びつけて論じた。
13『教育問題の社会学』	単著	1983年10月	あゆみ出版	子どもが主役の教育問題が多発するようになったのは1975年以降である。なぜ、教育問題の主役に子ども自身が登場したのか。「非行」「落ちこぼれ」、いじめ、からだやこころのくずれなど、具体的な現象の本質にせまりながら、子どもの人間的な発達の手台のなかがゆがめられているのか。この子どもの“くずれ”を克服するモメントはなにか。子ども研究の社会学的展開をとりあげた論文をあつめた。

14『小学校道徳教育の実践』	共著	1983年11月	あゆみ出版	第3章「今日の子ども生活と道徳の形成」を分担執筆。現に生きている、子どもたちの生活での人びととの接触のなかで、子どもの道徳性を形成されることをふまえ、道徳教育の実践の意味を考えた。
15『幼児期から学童期へ—接続の問題を考える—』	編著	1986年2月	大阪保育研究所編 あゆみ出版	「幼児期と学童期の『接続』に関する総合的研究」(研究代表高濱)に対する文部省科学研究費助成にもとづく研究成果の報告書を刊行、日本教育学会で報告した。執筆部分「はじめに」。
16未来の青年(『講座青年』第5巻)	共著	1991年6月	清風堂書店	第1章「未来の青年と教育」を分担執筆。 ①青年期への自己変革のモメントと教育・人格形成、②戦後における青年期教育、③青年期教育を普及させたもの、④青年期教育、量から質への発展、⑤青年期教育の矛盾の拡大と克服。
17『教育のアイデンティティー』	編著	1997年4月	現代教育科学研究会編 八千代出版	補章「教育の『社会科』と学校」を担当

(論文)

1生活指導における「生活」の概念について	単著	1960年12月	『生活指導』 No.17 明治図書	当時、生活概念をどうとらえるかで論争がおこなわれていた。それに参加して、「現にある子どもの生活をどのようにつかむか、つまり、子どもの生活構造をどう科学的に把握するか」という道筋のなかで考え、いくつかの問題提起をした。
2技術革新と科学技術教育	単著	1961年4月	『思想』No.442 岩波書店	技術革新と科学技術教育との関連について若干の提案をした。①科学技術教育の問題点、②技術教育・技能教育の蔑視について、③科学教育と生産力理論。
3“小集団理論”と“班・核”方式	単著	1964年3月	『生活指導』 No.58 明治図書	生活指導論とかかわって、子ども集団組織論の理論化を試みたもののひとつである。集団論と民主主義の関係を考察した。他の関連論文に「近代主義の克服と集団主義教育」(1962年7月、『現代教育科学』368号、明治図書)、「教育における集団の問題」(『大阪学芸大学紀要』—A.人文科学14号)等がある。

4「人間的能力開発」論と教育における「能力主義」	単著	1972年3月	『教育学論集』創刊号 大阪教育大学 教育学教室	教育における「能力主義」を念頭において、60年代「人間的能力開発」論と70年代の中教審答申を中心とする「能力主義」を分析、学歴社会での能力主義がどんな機能をもつものであるかを提起した。
5戦後日本資本主義と教育	単著	1974年11月	『経済』新日本出版	
6子どもの権利と「非行」問題	単著	1976年12月	『部落』臨時号 第348号 部落問題 研究所	第三の波として上昇家庭にあった少年非行の急増を、第一の波、第二の波と比較をし、子どもの権利の喪失過程に起こっていること。そして今日青少年にとっては、非行を克服する過程が青少年の権利、民主主義的自由にとって重要であり、非行を克服する過程こそが、その本人にとっても、社会的にも意味をもつことを論じた。
7今日の青年問題と青年の「生育」過程	単著	1977年11月	『経済』新日本出版	
8青少年の「社会参加」批判	単著	1979年6月	『生活指導』 No.259 明治図書	青少年の「社会参加」論を、要求を土壌にしないと操作主義になることを論じた。
9学校教育と子どもの暴力	単著	1980年8月	『季刊・教育法』36号夏季号総合労働研究所	子どもの暴力、いじめなど、変化の特徴を考察し、主体の気ばらしの方にいじめの根拠があることを論じたもの。①問題の所在、②子どもの世界の崩壊と子どもの暴力の変化、③教育関係の破壊と教師への暴力、④無気力と内面化する暴力。
10今日の家庭・家族問題と「家庭基盤の充実」の政策	単著	1982年1月	『福祉問題研究』 季刊第5号 ささら書房	家庭基盤充実政策のねらいをなにかを論じた。①問題の所在、②旧「イエ」制の崩壊と家族制度改革の意義、③「高度経済成長」と福祉要求の高まり、④「家庭基盤充実政策」の位置づけ、⑤「現代家族の危機」と克服の基本条件
11今日の教育危機の構造について	単著	1983年2月	『教育』No.422 国土社	教育の危機とはなにかをさすのか、その根拠はなにかを考えてみた。①はじめに、②“教育の危機”の今日の特徴、③教育の危機を克服する可能性、④今日の教育危機をとらえるいくつかの視点。

12 子どもの人間的危機と臨教審構想	単著	1986年6月	『保育の研究』No.6保育研究所草土文化	文部大臣の下での審議会から、内閣総理大臣の下での審議会として発足した臨教審の改革構想を、子どもの立場から、批判的に検討したもの。①見えはじめた臨教審構想、②教育基本法精神の恣意的解釈、③「多様化」と「自由化」の結合、④「新しい」能力主義教育の展開、⑤改革の課題は現実の分析から、⑥「教育の資質向上」策の問題点。なお、関連論文に「今日の子どもの特徴と臨教審第1次答申(1985年10月、『日本の科学者』Vol.20、No.10、日本科学者会議)、「臨教審の教育改革構想とわたしたちの課題」(1988年12月、『生活指導』No.390、明治図書)がある
13 子どもの「くずれ」と民主的な家庭関係	単著	1990年1月	『福祉のひろば』特集41号総合社会福祉研究所	子どもの危機は、家族も含めた生活のなかで進行している。と同時に、それを克服するきっかけも生活のなかに含まれている。家庭の危機、崩壊現象が子どもの発達のかげれにどうかかわっているかを論じ、克服の道を考えてもの。
14 教育と人格形成の「社会化」の発展と子どもの発達の矛盾についてー子どもの社会学的把握にかかわってー	単著	1992年7月	『教育学論集』21大阪教育大学教育学教室	大阪教育大学の退官最終講義を整理したもの。今日の子どもの変化を社会の発展と矛盾のなかで考えようとした。①問題の所在、②キーワードとしての教育と人格形成の「社会化」の発見と矛盾の展開。
15 子ども研究と教育・人格形成の「社会化」ー子どもの社会学的研究(1)ー	単著	1993年6月	『龍谷大学論集』第442号	あるがままに子どもをとらえる意味、社会や発達環境での矛盾の発展のなかで子どもを把握することから、「社会化」概念をキーワードとして考え、問題提起をしてみたと思ったものである。①はじめに、②今日の子どもの変化の特徴と子ども研究、③子どもの主体形成と発達環境
16 教育実践が学習指導要領をのりこえるとき	単著	1999年7月	『エデュカス』25号	
17 新学習指導要領の歴史的位位置と克服の課題	単著	1999年10月	『エデュカス』26号	
18 「成長中の世代」の主体的努力・自尊感情へのはげましを	単著	1999年6月	『子どもと教育』あゆみ出版	